

小型太陽光に100億円

レノバ、耕作放棄地を開発

再生可能エネルギー大手のレノバは小型の太陽光発電所開発に約1000億円を投じる。大規模太陽光発電所（メガソーラー）向けの土地が減っている。環境規制もあり、耕作放棄地などを活用した小型に各社とも活路を見いだす。

レノバは2030年度まで約1000億円をかけて毎年合計10万キロワット程度開発する。1カ所あたり100キロワット規模が多く、メガソーラーの10分の1程度だ。今後の開発ペースは年間1000カ所程度に増えると思われる。

リース大手も中小型への投資を拡大する。三菱HCキャピタルは年間数十億円を投じ、年合計4万〜5万キロワットを開発。三井住友ファイナンス&リース（FL）も子会社を通じて、中小型などで毎年20万キロワット開発する。

経済産業省によると、23年度に政府の補助制度などを使って導入されたメガソーラーは22年度と比べて4割減った。山地が多い日本では適地が少ないほか、自治体も環境保全などを理由に新規開発への規制を打ち出す。中小型では耕作放棄地などを活用できる。

大手企業を中心に30年ごろの脱炭素の目標を掲げている企業が多く、再生エネの調達需要が増えることに対応する。